

## 医事紛争のしおり

### 医療事故調査制度発足後5年を経過して

岡山県医師会副会長 清水 信義

2015年10月に始まった医療に起因する予期せぬ死亡を調査報告する「医療事故調査制度」が始まって5年が過ぎた。先般12月23日には、令和2年度第2回目の医療事故調査・支援事業運営委員会が開かれた。中四国ブロックの担当者として参加したが、今回は地方からはWebでの参加が大方を占めた。

医療に起因する予期せぬ死亡を報告するこの制度は、5年の期間を経て、それなりに周知されてきたと思えるが、報告件数は発足当時とあまり変わらず、年間400件足らずで推移し、5年間の累計で約1,900件となっている。これが報告すべきものがすべて報告されているのか、報告が漏れているのかは分からないが、特定機能病院などからの報告が相変わらず低いのは、病院の管理者の判断に任されているこの制度の仕組みに課題があるのではないかと思われる。最初から「医療事故」として報告するこの制度は、遺族が死亡を事故と思う契機ともなり、それを避けるために事故報告を控えることはあり得る事かもしれない。もちろん大部分の医療機関は、予期せぬ死亡と判断した場合、それを医療事故調査・支援センターに報告し、その後、院内事故調査を実施してその報告書をセンターと遺族に提出している。

このような中で、2020年12月29日の山陽新聞朝刊に「医療事故調査制度5年」の論説が掲載された。その書き出しは、「制度の実効性は不十分と言わざるを得ない」で、始まり「このままでは、やがて風化してしまう」というものです。

まず取り上げられているのは、人口100人当たりの発生報告数の差異であり、最多の宮崎県の5.6件、最少の山梨県の1.2件まで差が大きく、岡山県は2.1件、広島県は2.4件、香川県は2.7件で、人口の多い東京都は3.4件、大阪府は1.9件であり、病床規模当たりは、やはり病床数の多い施設では、病床数の発生件数は多い。しかし900床以上の病院では、報告件数がない施設もあり、事例発生を判断する管理者の基準差もあるかもしれない。予期せぬ死亡を管理者（院長）の判断にゆだねるこの制度は、患者側からの調査要請が即事故調査とはならない制度の問題点を指摘する声は、発足当初からあった。

冒頭の運営委員会でも、5年を契機に市民団体代表からは、制度の見直しの検討会設置の要望が出ており、これが取り上げられるものと思う。

この制度では、当該医療機関が院内事故調査を実施し、センターに報告書を提出するとともに、遺族にもその内容を報告するが、その内容に同意できない場合、センターにおける第三者による調査を実施する。このセンター調査は、報告総数の約7%であり、主に遺族からの申し出により医療機関が要請したものである。センター調査は、全国5ブロックが分担し調査を行っている。中四国ブロックの事務局は、岡山県医師会館内にあり、2名の看護師資格を持つ専任職員が勤務している。その業務は、センター本部の指示のもとで当該医療機関からの資料の取りまとめや遺族との連絡などである。調査を担当委員は事例の内容により、各学会が選定した専門医であり、主体は近隣大学の専門分野や関連分野の教授が担当する。1事例に関して2～3回の委員会を開催し、報告書を作成するが、多忙な中で時間を割いて現在の医療のトップの情報を集めて、社会が納得するような詳細な報

告書を作成してもらっており、その尽力には全く頭の下がる思いであり、社会的にはもっともっと高く評価されていい仕事と思う。5年を経過し、委員会での調査の方法もマニュアル化され、標準的な医療を基準に事例の内容を検討する方法は、報告書を完成度の高いものとしており、たとえ司法の資料となっても貴重な価値のあるものと思える。

私も統括支援医として、分野を問わずすべての事例の調査に参加している。もっぱら専門分野の意見を聞くことになるが、やはり事例の多くについては、死亡の原因は予期できないと思われるものが多く、これを遺族や社会にどのように理解して貰うかが報告書作成の背景要因となる。勿論、治療法を変えれば助かったかもしれないし、出血などはもっと早く対応すれば救命できたかもしれない事例も多いが、医療の実施体制の問題や施設の問題、人的体制などが大きく関与し、直接関与した医療者を特定できないか、すべきでない事例が多い。

治療の内容では、手術（分娩を含む）に起因する死亡の報告が圧倒的に多く、ことに近年内視鏡下手術に起因する死亡が多くみられる。医療技術の進歩にともない新たな予期せぬ死亡も発生し、遺伝子的な解析も死因の究明に必要となった事例もあった。

この制度の目指すところは、原因を究明して再発を防止することであり、事例の集積で一定のパターンを知ることはできるが、新しい治療法なども出てきて対応が難しく、事故数減少に結び付くのは、まだまだ先のことのよう思える。